

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第3回】基本の否定

第3回の講義は、基本の否定形。

「くしない」とか「くではない」とか、動作や行為、状態、事実なんかを打ち消すことだね。

これにはいろいろな形式があるんだぞ。

否定を表す副詞を使ったり、存在とか所有の否定を表す動詞を用いたり、あるいは無指の代詞を使ったりね。

え？ 無指の代詞って何だって？

まあまあそう急ぐなよ、順番に説明していくからさ。

1. 否定の副詞を用いる形

副詞ってのはどんな働きの語だった？

そう、主に述語の前に置かれて連用修飾する語だったよな。

否定の形式の第一は、まずなんといつてもこの副詞、つまり否定副詞を用いる形だよ。

代表的なものには「不」とか「非」とか「未」とかがある。

そこから今日の講義はスタートだ。

①否定の副詞「不^ず」「弗^ず」の用法

「弗」はともかくとして、「不」はよく目にするだろう？

「不動」の姿勢だとか、電車は「不通」になってるとか。

めっちゃ「不快」！とか、あいつの行動は「不審」だ！なんてのもよくいう台詞だよな。

だから「不」は日常的によく目にしたり聞いたりしてる否定副詞だね。

で、そういう例をよく思い浮かべてほしいんだが、「不」はどこに置かれてる？

「不動」は「動かない」、「不通」は「通じない」ってことだけど、それぞれ述語になる動詞の前に置かれてるだろ？

「不快」は「快くない」、「不審」は「つまびらかでない」ってこと。

これも形容詞の前に「不」が置かれてる。

なぜか？ 副詞だからだよ。

「不・弗」は主に、述語になる動詞を修飾して「～しない」と動作行為を否定、形容詞を修飾して「～でない」と状態を否定するんだ。

公^ハ不^レ知^ラ治^ヲ。

▼公^{こう}は治^ちを知らず。

▽あなたは治めるといふことを知らない。（＝治めるといふことがわかっていない。）

こいつは「知^ル」という動詞を修飾している例。

漢文では「知^ル」は、「理解する・わかる」という意味で用いられることが多いことも覚えときな。

「不知」は「知らず」と訓読して、「不」を打消の助動詞として読むわけなんだが、あくまで「不」は副詞。

ちゃんと「知」の前に置かれてるだろ？

いかにも副詞のように訳せば、「～しないこととして知る」から「知らない・わからない」という意味を表すわけ。

そういうところ、ちゃんと確認しといてくれ。

淵^{フチ}不^レ深^カ、則^チ不^レ清^ス。

▼淵^{ふち}深^かからざれば、則^{すなは}ち清^{きよ}らかならず。

▽淵が深くないと、（水は）清らかではない。

今度は否定副詞「不」が形容詞を修飾している例。

「深^シ」も「清^{フカナリ}」も形容詞だよ。

これもほら、「不」の置かれている位置は動詞の時と同じだろ？

得^レ之^ヲ、則^チ生^キ、弗^レ得^レ、則^チ死^ス。

▼之^{これ}を得^うれば、則^{すなは}ち生^いき、得^えざれば、則^{すなは}ち死^しす。

▽それを得れば生き延び、得られなければ死ぬ。

「弗」も「不」と同様、動詞や形容詞を修飾して「～しない・～ではない」という意味を表す否定副詞だ

よ。

「弗」も「不」も同じ意味を表すんだが、実は少し違いがあつて、始皇帝で有名な秦より前の時代では、形容詞を打ち消す用例は見られないし、他動詞を打ち消す時は目的語を省略して用いられたんだ。

つまり、右の例なら「不^レ得^レ之^ヲ」を「弗^レ得^レ」って表現したわけ。

でも、漢代以降は「不」と同様に用いられるようになったんだよ。

「不・弗」は、日本語の打消の助動詞「ず」として訓読するから、書き下し文にする時には、平仮名に書き改めるの、忘れんなよ！

さっきの例なら、「知らず」「深からざれば」「清らかならず」「得ざれば」だよ。

「知ら不」とか「得弗れば」とか絶対書くなよ！

◎ポイント！…否定の副詞「不」「弗」は、主に動詞や形容詞の前に置かれて連用修飾し、「くしない・くではない」という意味を表す。

不 ^レ A。 動詞	・	弗 ^レ A。 動詞	▼ A せず。	不 ^レ A。 形容詞	・	弗 ^レ A。 形容詞	▼ A ならず。
			▽ A しない。				▽ A ではない。

・「不」は日本語の助動詞「ず」と訓読するので、書き下し文にする時には平仮名に書き改める。

右がまとめだが、これからはいちいち動詞の場合、形容詞の場合…なんて分けて読みをまとめると、ややこしくなるんで、やめとくぜ。

※単独で用いられる「不」の用法

「不」は普通は「不^レ食^ヲ」（食べない）とか、「不^レ美^{ナラ}」（美しくない）のように、述語の前に置かれるだろ？

ところがだ、文脈から「不^レ○」の○がわかりきってる時は、省略して「不」だけで表現することがあるんだよ。

今^ハ 則^チ 或^{イハ} 置^キ、或^{イハ} 不^ス。

▼今は則ち或いは置き、或いは不^しず。

▽今はあるものは置き、あるものは置かない。

後半の「不」は、もう明らかに「不^カ置^カ」（置かない）の意味だろ？

わかりきってるから「不」だけで済ましちやっただ。

こういうことされると、日本人の我々はこまっちゃうんだな…だって「不」は日本語の助動詞「ず」って訓読してるんだからさ。

でも、昔の日本人はそこんところをうまく工夫して「そうしない」って意味で「しかせズ」と読んだんだ。頭いいよな。

「不」は「しかせズ」以外に「しからズ」と読むこともあるぞ。

上^カ曰^ト、守^セ尉^エ反^ハ乎^ト。对^ヘ曰^ト、不^ス。

▼上^カ曰^トは、守^セ尉^エ反^ハくか。」と。对^ヘて曰^トは、不^スず。」と。

▽皇帝がおっしゃるには、「守尉がそむいたのか。」と。お答えすることには、「そうではありませんせん。」と。

これなんかは、「不」は「不^カ反^カ」の意味なんだから、「しかせズ」と読んだっていいわけなんだが、

実際、我々だって「そむいたのか？」って聞かれたら、「そうではありません」って答えそうだろう？

だから、「そうではない」という意味で「しからズ」って読んでるわけだ。

訓読って早い話が日本語訳なんだから、自然な読み方が大事なんだよ。

◎ポイント！…否定の副詞「不」は述語を修飾して用いるのが本来だが、述語が文脈から明らかな時は、

「不」単独で用いられることがある。

・「そうしない」の意味で読むときは「しからズ」、「そうではない」の意味の時は「しかせズ」と読む。

②否定の副詞「不^{いまだ}」の用法

「未来」とか「未完成」とかいうだろ？ どちらの意味だ？

「未来」は「まだ来ない」、「未完成」は「まだ完成しない」って意味だよな。

つまり、この「未」は「まだくはない」という意味の副詞で、述語の前に置かれて、動作行為がまだ実現しないことを表すんだよ。

ところが、日本語の場合、「まだく（し）ない」と、前後で呼応する形で表現するから、「未」の意味を一度の読みでは言い尽くせないんだよ。

だから、まず「いまダ」と読んで、後でまた「ず」って読むわけ。

再読文字の代表格なんだが、今のでわかったら？ 2回読むるのは、「未」1語で未実現を言い表せる中国語と、2回に分けて表現する日本語の、表現のしかたのズレから生まれてるわけで、いわば日本語の都合なんだ。

別に特殊な字でもなんでもないんだよ。

使者 未^レ来^{タラ}。

▼使者^{しや}未^{いま}来^きたら^ず。

▽使者はまだ来ない。

「不来」だったら、単に「来ない」って意味。

それが「未来」になると、「まだ来ない」という意味になって、「来る」って行為の未実現を表すことになる。

その意味を副詞として述語に付加しているのが「未^ダ」なんだ。

「未来の夢」だとか「未来に向かって」とかいうだろ？ 要するにまだ来ない時のことをさしてるわけだな。

なるほど、「『未^ダ』は『まだくはない』って意味かあ…簡単だな。」と思った諸君、まあ基本はそれでいいんだが、実はこの「未^ダ」は100%未実現を表すかというところ、実はそうでもない面倒な語でもあるんだな…

肉食^{ニクシ}者^ハ鄙^{ニシ}、未^レ能^ハ遠^ニ謀^{スルコト}。

▼肉食^{ニクシ}の者^{モノ}は鄙^ひにして、未^{いま}だ遠^{あん}謀^{ぼう}すること能^{あた}はず。

▽肉食の人（＝権力者）は頑^{かた}なで、先を見通^{みとお}することができない。

常にぜいたくに肉を食^くってる高位高官の権力者が、イコール有能な政治家とは限らんのはいつの時代もどこの国でもあることなんだな。

ところで、この例の「未」^ダは、「まだ先を見通すことはできない」と訳すと、意味がよくわからないだろう？

この「未」は中国では「不」と同じ意味とされてるんだ。
つまり、「不」能「遠謀」^{スル}と同じ意味ってこと。

もうちょっと説明すると、「未」のこの用法は「不」の婉曲的な表現なんだ。

たとえば「不」為^サ「という」というと、あるいは表現者の「しないんだ！」という意志がこもってしまうけど、「未」為^ダ「という」と、今のところ「まだしない」の意から、あるいは将来するかもしれないと含みをもたせた「しない」の婉曲表現になるってことさ。

実際は「しない」わけだから、意味としては同じなんだけどね。

ちなみに後で部分否定のところでも触れるけど、よく用いられる表現に「未」^ダ必^ス A^セ「（未だ必ずしもAせず）ってのがある。

必定の否定を表して、「Aするとは限らない」って意味なんだ。
これも「まだ」Aするとは限らないって意味じゃないんだよ。

「未来」とか「未完成」とか普通に使う言葉だから、我々はどうしても「まだくはない」って意味だと思いついて入っちゃうんだが、必ずしも「まだくはない」という意味ではないということも知っていてくれな。

◎ポイント！…否定の副詞「未」^ダは述語の前に置かれて連用修飾し、「まだくしない・まだくではない」という動作行為の未実現の意味を表す。

未^{いまダ} A^セ。
▼未^{いま}だ A^セず。

▽まだ A^セしない。

- ・再読文字として、まず「いまダ」と読み、後から返って「ず」と読む。
- ・必ずしも「まだ」という未実現の意味では用いられず、「不」の婉曲表現の場合もある。

※単独で用いられる「未」の用法

「不」のところで、文脈から「不」○の○がわかりきってる時は、省略して「不」で表現することがあるって教えたろ？

それと同じような用法が「未」にもあるんだ。

陳亢問^ニ於^ニ伯魚^ニ曰^{ハク}、子亦^モ有^タ異聞^リ乎^ト。対曰^{ヘテ}、未也^{ハク}。…」

▼陳亢^{ちんこう}伯魚^{はくぎよ}に問ひて曰はく、「子^しも亦^{また}た異聞^{いぶん}有りや。」と。対^{こた}へて曰はく、「未^{いま}だし。…」と。

▽陳亢が（孔子の子の）伯魚に質問したことには、「（親は自分の子には特別な扱いをするものだが）あなたもまた（父の孔子からの）特別に聞いた教えがありますか。」と。（伯魚が）お答えしたことに、「そのようなことはありません。…」と。

伯魚は、あの孔子大先生の子供だよ。

だから、さすがの大先生も我が子は特別扱いして、何か他の弟子には伝えてない貴重な教えの1つもあるんじゃないかと、陳亢が尋ねたわけだ。

さすがだね、孔子大先生は、どうやら我が子だからって特別扱いはしなかったらしい。

さて、この「未也」、おそらく「未^ル之^ヲ有^ラ也」の省略形だと思っただが、過去にそんな事実はないという意味で、「そのようなことはない」という意味で用いられる。

必ずしも「まだ」ってニュアンスじゃないな。

この例でも、「まだそのようなことはない」といえば、これからあるのか？ってことになるけど、伯魚はそんなつもりではなかったろう。

◎ポイント！…否定の副詞「未」は述語を修飾して用いるのが本来だが、過去の事実を問われた時に、単独で「そのようなことはない」の意味で用いられることがある。

未^{ダシ}也。

▼未^{いま}だし。

▽そのようなことはない。

・再読しない。また、「未だしきなり」と読んでもよいが、「未だし」と読まれるのが普通。

③否定の副詞「否^{いな}」の用法

ちょっと変わった使われ方をするのが、この「否」って否定副詞だよ。

否定副詞って、「不」とか「未」とか、普通は「不〇」「未〇」って形で、述語の前に置かれて連用修飾する形で用いられるじゃないか。

でも、この「否」は、肯定と否定を並べた語句とか文で用いて、直前に述べられた内容を否定する形で用いられるんだ。

欲^ス下^ニ修^メ文^王業^ヲ東^ニ伐^シ以^テ觀^中諸^侯集^上否^ヲ。

▼文王の業を修め東伐して以て諸侯の集まるか否かを觀んと欲す。

▽（武王は父の）文王の偉業を修め、東征して諸侯が集まるかどうか（＝集まらないか）を觀察しようとした。

「諸侯集否」（諸侯が集まるかどうか）の部分に着目してくれ。

これ、明らかに「否」は「不^ル集^マ」の意味だろ？

これのどこが副詞？って思いたくなるよな？

でも、中国では副詞に分類されてるんだ。

副詞というからには、「不^ル集^マ」と同じように「否^ズ集^マ」のような用いられ方の例が膨大にありそうな

もんなんだが、ごく少数の例はあるものの、ほとんどが右の例のような使われ方なんだ。

そのへんはちよっと首をかしげちゃうんだが…

ともあれ、右の例は、肯定と否定を並べた語句に用いた例だ。

小人^ハ恐^ル矣、君子^ハ則^チ否^ズ。

▼小人は恐る、君子は則ち否ず。

▽つまらない人は恐れるが、有徳の人はそうではない（＝恐れない）。

これも、「否」は「恐^ル」を否定した「不^ル恐^ル」の「恐^ル」が省略されたものになる。

これは肯定と否定を並べて文に用いた例になる。

この場合、「そうではない」と日本語でなら表現するだろ？

だから「いな」ではなくて「しからズ」って訓読、つまり翻訳したわけだ。

他にも「しかせズ」って読む場合もあるぞ。

条件節に用いる場合もある。

聽^タ則^チ進^ミ、否^ミ則^チ退^ク。

▼聴けば則ち進み、否ざれば則ち退く。

▽（主君が自分の意見を）聞けば進み、そうでなければ（＝聞かなければ）退く。

紹介がてら「しかせズ」で読んだが、「そうでなければ」と口語訳してるんだから、「しからザレバ」と読んだっていい。

このへんの読みの使い分けは結構アバウトなんだ。

◎ポイント！…否定の副詞「否」は肯定と否定を並べた語句や文で用いて、直前に述べた内容を否定する形で用いられる。

A_カ 否_カ
▼Aか否_{いな}か

▽Aかどうか（＝Aでないか）

A_ハ B_{。ス} C_ハ 否_{。ス}
▼AはBす。Cは否_{しかぜ}ず。

▽AはBする。Cはそうしない（＝Bしない）。

A_ハ B_{。ナリ} C_ハ 否_{。ス}
▼AはBなり。Cは否_{しかぜ}ず。

▽AはBである。Cはそうではない（＝Bではない）。

A_{スレバ} 則_チ B_{。ス} 否_{ザレバ} 則_チ C_{。ス}
▼Aすれば則_{すなは}ちBす。否_{しかう}ずんば則_{すなは}ちCす。

▽AすればBする。そうでなければ（＝Aでなければ）Cする。

④文末に置かれて疑問を表す「不」「否」「未」

「不」「否」「未」は、これまで述べてきたように副詞なんだが、文末に置かれて疑問を表す語気詞としての用法がある。

尊君在_{シヤ}不_。

▼尊君_{さんくん}在_ありや不_{いな}や。

▽お父様はご在宅ですかどうですか。

「不」は文末に置かれて、「_ス（する）か、どうか（＝しないか）」という語気を表してるんだ。

「不」は意味的には「不_す在_ラ」に相当するんで、その省略形だと説明する先生もあるみたいだが、それは違うぞ！

それは間違ってる、省略形なら「在_{シヤ}不_ラ在_ラ」って用例もありそうなもんだが、ないぞ。

参考までにだが、現代の発音も普通用いられる「不」とは違うんで、副詞とは違う働きの語とみなすべきだろう。

視^ヨ吾^ガ舌^ヲ尚^ホ在^{リヤ}否^ヤ。

▼吾^わが舌^{した}を視^みよ。尚^なほ在^ありや否^{いな}や。

▽私の舌を見ろ。まだあるかないか。

この例文は『十八史略』によるんだが、同じ箇所が『史記』では「尚^ホ在^{リヤ}不^ヤ」になってる。つまり、「否」も「不」と同様に用いられてることさ。

この「否」は「不^ず在^ラ」に相当するんだ。

つまり、存在するか存在しないか？ということだな。

なに？舌が存在しないはずがないって？

おいおい、こんな有名な言葉知らないのか？ 脱線タイムの始まりだな。

張儀は蘇秦とともに戦国時代の縦横家として名高い人物だよ。

「じゅうおうか」とも「しょうおうか」とも読む。

要するに当時の大国だった秦とどう対応するかという外交策を売り物にした人たちのことさ。

「縦」は、対秦南北同盟、つまり縦のつながり。

「横」は、秦とつながって国の安定をはかる、つまり横のつながりだ。

この張儀が若かりし頃、学業を終えて諸侯に遊説してたんだが、ある時、楚の国の宰相と酒を飲む機会があったんだ。

そしたら、その宰相が大事にしてた宝玉がなくなっちゃってな、張儀が盗んだんじゃないか？って疑われることになったんだ。

疑われるだけならまだしも、捕まって数百回も鞭打^{むち}たれる始末。

彼の奥さんが言ったんだ、「ああ、あんたが書物など読んで遊説してなきゃ、こんな恥はかかされなかっただろうによ。」って。

その時、張儀が言った言葉がこれさ、「俺の舌を見ろよ、まだあるかないかい？」

奥さんは「舌ならあるわよ。」と答えたんだが、張儀は「十分さ。」って。

舌さえあれば、必ずや屈辱を晴らすことも、大義を成し遂げることもできるって気概を示したんだ。

いつの時代も外交術にはいかに相手を説き伏せるかっていう能力がいるわけなんだが、まさにそれだな。

寒梅^{ケツリヤ}著^シ花^{ハナ}未^ミ。

▼寒梅^{かんばい}花^{はな}を著^つけたりや未^{いま}だしや。

▽寒梅は花が咲いたかどうか。

これは「未」を文末に置く形。

「未」は「未^ダ著^{ケタラ}花^ヲ」に相当する。

でも、その省略形ではないんだよ。

この「未」を文末に置くことで、「著^ツ花^ヲ」（花をつける）という動作が完了したかどうかを問いかけてるわけだ。

だから、「寒梅はもう花が咲いたか？」と訳したっていい。

実際、そういうつもりで問いかけてるんだ。

これら文末で用いられて、「～するか、どうか」という問いかけを表す「不」「否」「未」は、そういう問いかけの語気を表してるんで、副詞ではなく語気詞とみなすべきだろうね。

ところで、「～や、いなや」「～や、いまだしや」の「～」の部分は、本当は日本語の終止形であるべきだね。

最後の例なんかは、「花を著けしや、未だしや」とか読んでる本もあるんだけど、よろしくないね。

「や」という日本語の助詞は本来終止形につく語だからね。

ほら、あの在原業平の有名な歌「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は…」の後、何だった？

「ありやなしやと」だろう？「あるやなきや」じゃないだろう？

漢文訓読では時々正規の古典文法からはずれて読まれることがあるんだが、これもその1つだね。

◎ポイント！…「不」「否」「未」は、文末に置かれて疑問を表すことがある。

A、^{スヤ}不^ヤ。

▼Aすや、不^{いな}や。

▽Aするか、どうか。

A、^{スヤ}否^ヤ。

▼Aすや、否^{いな}や。

▽Aするか、どうか。

A、^{スヤ}未^{ダシヤ}。

▼Aすや、未^{いまだ}だしや。

▽Aしたか、まだか。（↓もうAしたか。）

・「Aするか、不^{いな}か。」・Aするか、否^{いな}か。」と読まれることもある。また、「A^いするや、いなや」と誤読されることもある。

⑤ 否定の副詞「非」^{あらス}「匪」^{あらス}の用法

否定の副詞には、「非」^スってのもあるぞ。

これは「**AはBである**」という判断文で、それを打ち消して「**AはBではない**」という意味を表す時に用いられるのが基本だよ。

つまり、主に名詞述語を否定するのがその働きだ。

子^ハ魚^ニ。

（君は魚だ。）

これは「AはBである。」という判断文だろ？ それを「非」^スで否定すると、

子^ハ非^レ魚^ニ。安^{カン}知^ン魚^ニ之^ノ樂^ニ。

▼子^ハは魚^ニに非^ズ。安^イくんぞ魚^ニの樂^ニしみを知らん。

▽君は魚ではない。どうして魚の樂しみがわかるだろうか。（いや、わかるはずがない。）

否定副詞「非」^スが名詞述語「魚」^{ナリ}（魚である）を修飾して、「魚ではない」という意味になるんだ。

この「非」^スについては、「〜だ・〜である」の意の動詞「為」^{タリ}の反対で、「〜ではない」という意の動詞だとする説もある。

その場合は、述語「非」^スに対して「魚」^{ナリ}がその目的語にあたることになるのかな。

でも、中国でも一般的には否定副詞に分類されてるんで、ここでもそういうことになりそう。

我^ガ心^ハ匪^レ石^ニ、不^ル可^カ転^ガ也^ニ。

▼我^ワが心^ニは石^ニに匪^ズ、転^ハがすべからざるなり。

▽私の心は石ではない、転がすことはできないのだ。

「匪」^スも「非」^スと同じだと考えていい。

「石である」という判断を打ち消して、「石ではない」という意味を表してるわけだ。

「非」^スや「匪」^スは、普通は名詞述語を修飾するんだが、動詞や、まれに形容詞を修飾することもあるんだ。

臣^シ非^レ知^ル君^ヲ。知^ル君^ヲ乃^チ蘇^ハ君^{ナリ}。

▼^{しん}臣^{きみ} 君^しを知る^{あら}に非^ず。

▽私は君を理解しているわけではなく、君を理解しているのは蘇秦殿です。

「非^ス」が動詞や形容詞を修飾する時は「不」と変わらないと説明されることもあるんだが、やっぱりちよつと違うと思うな。

この例だって、「君を理解しない」と行為や動作を否定するんじゃないなくて、「君を理解するわけではない」または「君を理解のではない」と否定的判断を示しているんだよ。

形容詞の場合だって、たとえば「不^{ナラ}賢^{ナラ}」なら「賢くない」って状態を否定するんだが、「非^ス賢^{ナルニ}」なら「賢いわけではない・賢いのではない」と、判断を否定してるんだよ。

◎ポイント!...「非」は否定的判断を表す。

非^ス A。^ニ

(Aは名詞)

▼Aに非^{あら}ず。

▽Aではない。

非^ス A。^{スルニ}

(Aは動詞)

▼Aするに非^{あら}ず。

▽Aするわけではない・Aするのではない。

非^ス A。^{ナルニ}

(Aは形容詞)

▼Aなるに非^{あら}ず。

▽Aであるわけではない・Aであるのではない。

・「匪^{あらス}」も同じ働きをする。

2. 存在や所有の否定を表す動詞「無^シ」を用いる形

君らが1年生の時…え?いつだって? 馬鹿だなあ、このためぐち先生に「漢文の基本構造編」の講義を受けてた時のことだよ。

え? じゃあ今は何年かって? ほんとに馬鹿だなあ、2年生だよ。

君らも立派に基本構造をマスターして、今は立派な2年生になってるわけ。

で、なんだつけ?

そうそう、君らが1年生の時、その最初の講義で「存在文」ってのを教えたことがあるだろ?

「どこどこに何々がある」とか「どこどこに何々がいる」とかいう、ものの存在を表す文さ。

「山頂_二有_一大池_二。」（山頂に大きな池がある。）なんかがその典型的な形になる。

「山頂」が存在主語だが、「有」が存在と所有の意味をもつことから、「山頂が大きな池をもつ」と考えれば文の構造がわかりやすいって。

この否定形はどうなる？

山頂_二無_一大池_二。

▼山頂_二に大池_一無_一。

▽山頂に大きな池がない。

と、こうなるだろ？

「有_一」の反対は「無_一」なんだからさ。

「無_一」は、存在や所有を否定する動詞だよ。

したがって、「有_一」と同じく存在文の形式をとって、「A_二無_一B」の構造をとって、「AにBがない」「AにはBがない」「AはBをもたない」という意味を表すことになるんだ。

まずは、存在しないことを表す例。

梁_二無_一相_二。

▼梁_二に相_一無_一。

▽梁の国には宰相がない。

存在文は、構造上の目的語が意味上の主語を表し、構造上の存在主語がその存在する範囲を表すから、この文の場合、目的語「相」（宰相）が意味上の主語となって、その宰相が存在しない範囲を存在主語「梁」が表すことになる。

群臣_二無_一敢_二諫_一者_二。

▼群臣_二敢_一へて諫_二むる者_一無_一。

▽群臣に諫めようとするものはいなかった。

この文も同じだよ。

動詞述語「無_一」の目的語「敢_二諫_一者_二」（諫めようとする人）が存在しない範囲を存在主語「群臣」が表している。

「者」は、「敢諫」(諫めようとする)を名詞化する働きの構造助詞だったよな。
これのおかげで、動詞述語「無」の目的語になりやすくなってるんだ。

目的語は常に名詞か名詞句でなければならないからな。

動詞「無」が存在文を作るとき、「有」がそうであるように、「A無B者」という形をとることが多いのは、そういう事情によるんだよ。

もちろん「者」は必須じゃなくて、置かれないこともあるけどな。

◎ポイント!...動詞「無」はものの存在を否定し、存在文を構成する。

A無B。(Bは名詞)

▼AにB無し。

▽AにBがない・AにBがない。

A無B者。(Bは動詞)

▼AにBする者無し。

▽AにBするものがない。・AにBするものがない。

・「者」が置かれずに、「A無B」の形をとることもある。

「有」が所有の意味をもつように、「無」は「もたない」という意味ももってる。

その場合は、存在文と同じ形式「A無B」で、「AにはBがない」「AはBをもたない」という意味を表すんだ。

次のは、「もたない」ことを表す例だよ。

蛇固無足。

▼蛇固より足無し。

▽蛇にはもともと足がない。

「蛇固無足」と読んでもいい。

これも存在文と考えて、「蛇には足が存在しない↓蛇には足がない」としてもいいんだが、それは要するに蛇は足をもっていないということだろう？

そういう意味では所有文といってもいいかな。

ところで、この話は有名な「蛇足」という成語が生まれた『韓非子』の…え？その話は知ってるからもういいって？ じくじく…

◎ポイント！…動詞「無_シ」は所有を否定することもある。

A (二)
無_シ B。

(Bは名詞)

▼A (に) B 無し。

▽AにはBがない。・AはBをもたない。

動詞「無_シ」を用いて否定を表す表現で、よく見られるのに「無_シ以_テ」_{スル} っていうのがある。
たとえば、

漢軍至、無_シ以_テ渡_ル。

▼漢軍_{かんぐん}至_{いた}るも、以_{もつ}て渡_{わた}る無_なし。

▽漢軍がやってきても、(川を) 渡る手立てはない。

あれ？この文、どこかで見たことがある！という君、なかなかよく勉強してるね。

ほら、垓下_{がいか}の戦いで敗れた項羽が、四面楚歌の場面の後、なんとか脱出して烏江_{うかう}まで来たときのエピソードだね。

烏江の宿場の長が、彼のために川を渡る船を用意して待ってたんだ。

川を渡った先の江東地方は土地は狭くてもそれなりにあるし、人だっている。

王となるだけの土地だから、とにかく早く川を渡ってください、漢軍が追いついてきても、この川を渡る手立てはありません！ってさ。

まあ、項羽は結局渡らなかつたんだけどね。

さて、この「無_シ以_テ」_{スル}、前置詞「以_テ」が含まれているのわかるかな？

ってことは、前置詞の働きが意味に加わるってことさ。

つまり何かを用いてするものがない、あるいはもたないってことだろ？

だから「無_シ以_テ」_{スル}は、「_{スル}する手立てがない・_{スル}する手段がない」という意味を表すんだ。

これを客体を名詞化する構造助詞の「所」を補って説明するとわかりやすい。

「無_シ以_テA」_{スル}は、「無_シ所_レ以_テA」_{スル}と同じ意味になる。

「所」は前置詞「以_テ」の客体さ、つまり「ソレを以て」の「ソレ」だ。

「無_シ所_レ以_テA」_{スル}は、「ソレを用いてAするソレ」がないんだよ。

だから右の例の場合なら、「無_シ以_テ渡_ル」は「無_シ所_レ以_テ渡_ル」で、「ソレを用いて渡るソレがない」って

意味になる。

ここでソレって何だい？ 川を渡るための何らかの手段だろ？ 別に船と限ってるわけじゃない。

わざわざ「所」を入れて説明したのは、前置詞「以」の目的語をそれと特定されないものにするためさ。

この「無^シ以^テ渡^ル」は、「無^シ以^テ船^ヲ渡^ル」の省略形じゃない、「以」の目的語は、今ここにある船以外の、何らかの川を渡る手段なんだよ。

◎ポイント！…「無^シ以^テ」は手段がないことを表す。

無^シ以^テ A^{スル}

▼以^テ A^{スル}する無^シ。

▽Aする手段がない。・Aする手立てがない。

3. 無指代詞「莫^{ナシ}」を用いる形

「なシ」と読む字には、「無^シ」以外に「莫^{ナシ}」がある。

我々日本人はどちらも同じ読み方をしてるけど、実はかなり性質が違うんだぜ。

「無^シ」はさっきも説明したように、存在しないことや所有しないことを表す動詞だよ。

でも、「莫^{ナシ}」は動詞じゃない、中国では無指代詞といわれてるんだ。

へ？って思ったろ？

無指^シってのは、指示するものがないということ。

日本語だとわかりにくいんだが、君らは英語も学んでるじゃないか。

ほら、「nothing」とか「nobody」とか、存在しないもの、存在しない人という意味を表す代名詞があるだろ？

実はこの「莫^{ナシ}」は、指示する内容がない代詞として扱われているんだ。

「莫^{ナシ}」は、「不定のある人(もの)がゝることがない」という意味を表すのが基本だ。

「莫^{ナシ}」がなにゆえそのような意味を表すのか、きちんと説明されているわけじゃないんだが、鈴木直治という学者は、資料に基づいて「莫^{ナシ}」が「無或」の合音によるものという推論を述べている。

それによれば、「或るひとがゝることがない」という意味になるから、「莫^{ナシ}」にはもともと「あるひと」が含まれているんだよ。

左右皆泣、莫^{ナシ}能^ク仰^ギ視^{ルモノ}。

▼左右皆泣き、能く仰ぎ視るもの莫^{ナシ}。

▽側近たちは皆泣き、誰も仰ぎ見ることができなかった。

これは垓下に追い詰められた項羽が四面皆楚の歌に包まれた中で自分で詩を作った、その時の周りの人たちの様子を描いたシーンだね。

習ったって？ そりゃそうさ、あまりにも有名なシーンだからね。

あれ？ なんだ？ 変な顔してるやつがいるな。

どうした？ へ？ この訳でいいのだった？

ふむふむ、テストでこう訳して×にされたってか。

「仰ぎ見ることが出来る人はいなかった」と訳せと言われたんだな。

なるほど、ありそうな話だな。

たしかに訓読では「仰ぎ視るもの莫し」と読んでるんだから、「仰ぎ見ることができなかった」とか「仰ぎ見られなかった」という訳は忠実な訳じゃないように思えるよな。

でも、「莫」は無指代詞とされてるんだから、「莫能仰視」は「存在しない人が仰ぎ見ることが出来る」から、「誰も仰ぎ見ることができない」って訳しても、間違いとは言えない。

「莫能仰視」の元々の意味は「不定のある人が仰ぎ見ることができるといことがない」だろうし、その意味では「仰ぎ見ることが出来る人はいない」という訳も、微妙にずれてるよな？

どちらにしても、結局のところ意識なんだから、どっちでもいいんだよ。

×にした先生には失礼になっちゃうけど、「莫能仰視」という漢文の訳ではなくて、「よくあふぎみるものなし」という日本の古文の訳を求めたことになるね。

ところで、今の説明で気づいたかもしれないけど、存在しないことを表す「無」を用いて近い表現をすると、「無能仰視者」になるけど、右の例は「莫能仰視」で、「者」という構造助詞が用いられないよな？

なぜだかわかるかい？ そりゃそうだろう？ 「莫」は無指の代詞で文の主語だぜ。

もし「者」を用いたら、「存在しない人が仰ぎ視ることが出来る人」という文になっちゃうじゃないか？ だからだね。

でも、実際には、まれに「者」を伴っている例を見ることがあるんだ。

それはおそらく「莫」が「無」と同じ意味で用いられているんじゃないかな。

「莫」と「無」は、古代の音がよく似ていたそうだからね。

あるいは、この場合は、さっき述べたような「存在しない人が仰ぎ視ることが出来る人だ」という判断文の構造なのかもしれない。

そうそう、この例文でひとつ思い出したよ。

昔、このためぐち先生が若かった頃にさ、全国の漢文が御専門の先生方、大学の教授やら高校の先生やらが何百人も参観しておられる中で、『四面楚歌』の授業をしたことがあるんだ。

その後の研究会で、お偉い先生の一人が、「あなたは『あおぎみる』と読んでいたが、あれは『おーぎみ

る』と読むのです。正しく読むように！」と上から目線で一喝されたんだ。

ははあ…と平身低頭したけどさ。その後、実は日本語として「あおぎ」と読むのが正しいことがわかったんだ。

「葵」なんかも「あふひ」と書くけど、「おーい」じゃなくて「あおい」だろう？

歴史的仮名遣いにおける二重母音の読みの例外にあたるものなんだが、よく調べもせずに知ったかぶって物を言つと恥をかくつてことかな。

言わなくてもいいことを言つたあのお偉い先生、きつとどこかで「おたく、それ違いますよ。」って言われて赤っ恥かくことになったんじゃない…

◎ポイント！…無指の代詞「莫」は文の主語となり、「存在しないもの・存在しない人がゝする」から「何ものもゝしない・誰もゝしない」という否定を表す。

主語 述語
莫_シ A_{スル}

▼Aする莫_シ。

▽何ものもAしない。 ↓Aするものはない。

誰もAしない。 ↓Aする人はいない。

・人がいないことを表す時は、「莫_シ A_{スルモ}」と読まれることが多い。
・「莫_シ A_{スル}者」のように「者」を伴うことはごくまれである。

4. 否定副詞「不」と可能的助動詞「能」「可」「得」を用いて不可能を表す表現

否定副詞と可能的助動詞を用いて、不可能を表す表現もよく出会っね。

それについて少しばかり触れよう。

国_{フル}亡_レ不_レ能_レ救_フ。

▼国_{くに}亡_{はろ}ぶるに、救_{すく}ふ能_{あた}はず。

▽国が滅びるのに、救うことができない。

「不_ハ能_{スル}ゝ」は、能力的に可能であることを表す助動詞「能」と否定副詞「不」をあわせ用いた表現で、「ゝすることができない」の意だ。

よく「理解不能」とかいっただろ？ 日本語でも普通に用いるよな。

この「能」という助動詞は、普通は「よく」と読んで、「不能」の形をとった時だけ、「あたはず」って読むんだ。

「あたふ」というのは日本語の八行四段活用動詞だけど、昔から「あたはず」とか「あたはぬ（こと）」といった用いられ方しかないんだ。

だから、漢文訓読の場合、たとえ否定文でも、「ず」と読む「不」に返って読むとき以外は別の読み方で「よく」と読むことにしてる。

間違つて「否定文では『あたはず』と読む」という先生がいるけど、たとえばさっきの例文でも、「莫^モ能^{ケル}仰^{ギル}視^ル」は、「よく」と読んでただろ？「あたふなシ」なんて、まず日本語としておかしいんだよ。

無^ク船^{フネ}、不^レ可^カ濟^ス。

▼船^{フネ}無く、濟^{ワタ}るべからず。

▽船がなく、（川を）渡ることができない。

「可^{ベシ}」は、もともと「してよい」という許可を表す助動詞だよ。

それが、内実を備えて許可できるというところから、可能の意味を表すようになったんだ。

それを否定副詞「不」とあわせ用いて不可能を表すわけだ。

したがって、「不^{カラス}可^ス」は、能力的に、あるいは許可されないために「することができない」という意味を表す。

気をつけなきゃならんのは、今も言ったとおり、「可」は許可も表すから、「不^{カラス}可^ス」がいつも不可能を表すとは限らないってこと。

「できない」ではなくて、「してはいけない」という不許可を表すこともあるから、文脈でちゃんと判断しないとだめだよ。

有^リ兵^{ヘイ}守^ル関^{カン}、不^レ得^デ入^ス。

▼兵^{ヘイ}の関^{クワン}を守る^{マモル}有^アり、入^{イル}るを得^エず。

▽関所を守っている兵士がいて、入ることができない。

これは、機会があるから可能であることを表す助動詞「得」と否定副詞「不」を併用した表現だね。したがって、「不^{スル}得^ト」は、機会がないから「できない」という意味を表すことになる。この例の場合、関所を守ってる兵士がいるから、入るチャンスが得られないんで入れないんだよ。

不可能を表す表現の3種類、ちゃんとわかったかな？

復習するぞ！たとえば、「泳ぐことができない」という不可能表現の場合、かなづちだから泳げない場

合は「不^レ能^ハ游^ハ」、泳ぐ力はあるんだけど、たとえば医者さんに泳いじやいけなと言われていて泳げない場合は「不^レ可^{カラ}游^グ」、泳ぐ力もあり泳いでもいいって言われてても暇がなくて泳げない場合は「不^レ得^{グラ}游^ル」。

まあ、そんな使い分けをしてるんだ。

◎ポイント！…「否定副詞＋可能の助動詞」で不可能を表す表現には3種類があり、それぞれ微妙に意味が違う。

不^レ能^ハ A^{スル} (ト)

▼Aする(こと)能はず。

▽Aすることができない。 …能力的に不可能

不^レ可^{カラ} A^ス

▼Aすべからず。

▽Aすることができない。 …能力的にまたは許可されていないので不可能

・「不^レ可^{カラ} A^ス」は、「Aしてはいけない」という意味を表すこともある。

不^レ得^{スル} A^{スル}

▼Aするを得ず。

▽Aすることができない。 …機会がないので不可能

5. 「不^レ敢^{アヘテ}ス」の形

否定副詞と助動詞をあわせ持ちいる表現は、可能の助動詞以外にも色々あるんで、全部とりあげるわけにもいかないんだが、もう1つよく用いられる形があるんだ。

意志の助動詞「敢^{アヘテ}」との併用だよ。

これはよく間違った説明がされるんで、ここできちんと押さえておこう。

蘇秦之昆弟妻嫂、側目^メ不^レ敢^{アヘテ}仰視^セ。

▼蘇秦の昆弟妻嫂、目を側めて敢へて仰視せず。

▽蘇秦の兄弟や妻や兄嫁は、目をそらして見上げようとはしなかった。

助動詞「敢^{アヘテ}」は、しにくいことを押し切ってしまうという意志を表すんだね。

だから「大雨でも運動会は敢行します」つてのは、めっちゃめっちゃ無理があるのに、そこを押し切つてやることをいうわけだ。

それを否定副詞「不」で打ち消した「不^ヘ敢^テ」の形は、しにくいことを押し切つてまでは「しようにしない」という意味になる。理の当然だね。

さっきの運動会の例でも、「大雨なので、運動会是不敢行です」つて言ったとして、それはさすがに大雨なんで、無理には行いせんつてことだろ？ 漢文だつて同じだよ。

ところが、学校ではいまだに「不^ヘ敢^テ」を、「決してしにない」という強い否定だと言い張る先生がいるんだ、困ったことに。

言つとくが、中国の語法書にそんな説明はまったく見られないんだぜ。

君らの中にも強い否定と教わつた人があるかもしれないが、きれいさっぱり消し去つてくれ。間違つてるんだから。

さて、右の例だが…

縦横家で有名な蘇秦がまだ諸侯に受け入れられずに困窮を極めていた頃、彼の妻や兄嫁は蘇秦を冷遇したんだ。

彼が遊説から帰つてきても、奥さんは機織り器から降りてもこないし、兄嫁はご飯も炊いてやらないつて、ひどい仕打ちさ。

ところが、後に栄達して六国の宰相となつた時には顔を上げることすらできなかったんだ。

つまり、蘇秦の高い地位を前に、それをおかして顔を上げるといふのは勇気のいることであり、それを押し切つてまではできないつてことを「不^ヘ敢^テ仰^セ視^セ」が表してるんだ。

「決して見上げようとしなかった」じゃない、畏れ多くて「見上げようとはしなかった」んだよ。

燕国^ニ有^リ勇士^ニ秦舞陽^ニ、年十三^ニ殺^レ人^ヲ、人^ハ不^ニ敢^テ忤^レ視^セ。

▼燕国^{えんこく}に勇士^{ゆうし}秦舞陽^{しんぶやう}有り、年十三^{としじふさん}にして人^{ひと}を殺^{ころ}し、人^{ひと}敢^あへて忤^ご視^しせず。

▽燕の国に勇ましい男で秦舞陽というものがおり、十三歳で人を殺し、人はまともに見返そうとはしなかった。

この例も、もうわかるね？

13歳で人を殺すような怖^こいやつだぜ。

「決して見返さない」んじゃない、怖^こくて「見返そうとはしなかった」んだよ。

へたに見返せば、ぼこぼこにされるかもしれないじゃないか！

◎ポイント…「不敢」は、しにくいことを押し切つてまでは「しようにしない」という意味を表す。

不_ニ敢^{へテ}_{一。}A_{。セ}

▼敢へてAせず。

▽Aしようとする。

・「決してAしない」という強い否定の意味は表さない。

よし、これで否定の基本は押さえたよ。今日の講義はここまで。

次回は、否定の形では君らがよく難しいと思う、部分否定と二重否定について学習しよう。

印刷・配布禁止